

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

新学術領域研究

第3回全体集会「これまでの研究の集約と今後の研究の方向性」第2部

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4850

小長谷：ご紹介ありがとうございます。私はモンゴルについて研究しておりますが、欧米の研究機関に勤める友人が私に、日本におけるモンゴル研究は「ディテールの帝国だ」というのです。そういうと誉められているように聞こえますが、実はストラクチャーがないというか、大きなまとまった考え方でものごとを見られないということ、批判した言葉なのです。それはモンゴル研究だけに限ったものではなくて、日本人の得意とするきめ細かな研究と、得意でない面を同時に指摘しているのだらうと思います。その得意とするほうを仮に重箱系と言うなら、得意でないほうは大風呂敷系と言えるかもしれません。物事の全体を大づかみに捉えることは大事だし、細かいことも大事だし、どちらも大事なのですが、この重箱を風呂敷で包むことがもっと大事になってきます。今日の先ほどまでのお話と後のほうのお話が、これから先に上手く組み合わせさせていくかということが、これから後に残された、今後の研究の課題だと思います。

だから、比較できるかどうかという以上に、やはりこの2つの異なるベクトルを持つ研究をどうまとめていくかということになると思います。それに対して、私自身すぐにはアイデアが出ないのですけれども、色々感想を述べてみたいと思います。

まず、最初に宇山先生のご発表では、冒頭に「帝国として比較可能か？」とあって苦悩されている姿が見えます。でもここから「帝国として」というのを取って、そもそもが比較可能かということが問題だとしたほうが、むしろ新学術領域にふさわしいわけです。先ほど申しましたように、簡単に比較できるのだったら新学術領域にならないから、「帝国として」というのを外しても比較は難しいという点に意味があります。言い換えれば、最初

に岩下さんが歴史を無視したほうがいいと極端におっしゃいましたが、本来歴史的に考えると議論しづらい次元を一緒にするというところに、今回意味があるということになります。だから、歴史的に言えば、イギリス帝国で言えばインド、ソ連で言えば中央アジア、中国で言えば新疆やチベットあたりが、比較されるものとして並ぶくらいだったのが、インドの場合は1947年くらいに独立して、もう既に十分な経済力をもっているのに対して、中央アジアの国々が独立したのは、その大体半世紀後です。中国はどうでしょうか。30年くらい後に中国の経済発展がゼロ成長になったら、共産党の支配も終わって、周辺地域を手放すということもあり得るかもしれません。

大体、半世紀くらいずつずれているようです。そういう時間差として理解することも出来るし、時間差はすなわち構造差として理解することも出来ます。だから本来違うものを比較するフレームを設定していったらいいのではないかと思います。文化人類学の場合は、歴史学よりは時間に対してルーズです。それよりむしろ構造の違いを気にします。本来は違うものだという点で時間拘束からフリーで居られるという点からいうと、人類学的には比較しやすいのではないかという感じがします。帝国や大国というのは、一民族＝一国家ではなく、様々に違うものも含めた存在ですから、例えば＜多様性と統合＞、＜diversityとintegration＞、あるいは＜包摂と自律＞とか、つまり違うもの同士の比較ということになるでしょう。

外延部が広いとか、相当に色々なものをまとめあげたものであるというのが、リージョナルパワーズの前提ですから、そういう＜多様性と統合＞をキーワードにして、設定することができるのではないのでしょうか。言い換えれば、違うものを包摂する統治の技法に対して、人々がそれに抗うとか、あるいは抗うのではなくておもねるとか、最先端の芸術家がそうであるように解体の方向を描いていくとか、そういう包摂あるいは統合する力に対する人々の政治学ないしは文化の動きというように、2種類のベクトルの違いを考えて設定をしておく、それぞれ全然違う話がうまくまとまっていくのかも知れないと思いました。

最後に指摘したいのは、こういう比較の、チャレンジングなのだけれども、それ自身が持っている致命的な欠陥というのを押さえておいたほうがいいだろうと思います。それは、例えば30人あるいは40人くらいのクラスメートの中で、最も成績優秀で体力のある3人を評価して、クラス全体のことが言えるかといったら、全然言えないですね。つまり、トップ3を見て全体は説明できないということです、その見えなくなってしまうのは何かということも考えておかなければいけません。そのことを言おうと思っていたのですが、実際には研究されているということですね。例えばモンゴルだったら、殆んど同時

期にパワーを持ち始めた中国とロシアに挟まれているので、どちらかにつくのが幸せな選択かというのが問題となるのですが、例えばインドネシアはそういう点で言うとうなるか、アフガニスタンはどうなるかという問題と関わっています。大国と大国の間なんだけれども、その大国のあり方に、今言ったような時間差みたいなもの、あるいは構造差みたいなものがありますから、そういうものの狭間にある落ちこぼれ組のあり方みたいなものが、きちんと山根さんのところでフォローされているのだな、というふうには今日分かりました。あるいは、ボーダー・スタディーズの方も、リージョナルパワーズの縁辺部に目配りするという意味では、結局両プロジェクトは2つで1つみたいなのところもあるのだなと思いました。

それから、現代のパワーのありかたというのは必ずしもリージョナルではなくて、リージョンを超えてヘゲモニーを発揮するわけです。だから脱領域的なヘゲモニーについての問題が、このプログラムが見失ってしまう致命的な欠陥の1つかもしれないと思うのですが、それは例えば文学の研究等によって補われるということが昨日から参加させていただいて分かりました。ということで、難しいけれども頑張ってください。